近代日本における〈新しい女〉の一肖像

——宇野千代論——

“A New Woman” in the Modern Japan: On Uno Chiyo

徐　　青

Xu Qing

浙江理工大学外国語学院

School of Foreign Languages, Zhejiang Sci-Tech University

E-mail: xuqingligong@126.com

Abstract

The career of Japanese female writer Uno Chiyo could see as a typical model of the image of a New Woman, of course, which is not a reflection of all women’s life in those days. And this paper argues that the image of that is the “portrait” or a reflection of modern Japanese capitalism in fact. At the same time, the various desires of “mass” are also expressed, realized, and consumed with Uno. Calculating economic self-reliance of Uno can also be seen as a part of capitalist desire. This aspect of “New Woman” image is very important. Thus, there is also the significance of studying Uno’s generations in understanding the Modern Japanese Society.

Keywords: Modern Japanese；New Woman；Uno Chiyo

はじめに

近代日本において女性は如何に描かれてきたのか？

この問いにおいて、宇野千代が確実に一つの画期を構築する表現者であることは論を待たない。宇野千代研究の意義は、単に日本文学研究にとどまらず、近代日本研究においても然るべき位置づけを与えうるであろう。

いうまでもなく、これまで宇野千代とその作品はさまざまに議論されてきたが、日本国立情報学研究所 CINII における検索結果によれば、日本における宇野千代に関する研究論文などは総計183件にのぼる（2019年 7 月30日現在）。その研究領域は大まかに、四つに分けられる。宇野千代の（一）作家論、（二）作品論、（三）その周辺、交渉のあった人々に関する研究、（四）その着物などへの美意識に関する研究である。

他方、中国におけるそれは、CNKI.NET（中国知網）の検索結果によれば（2019年 7 月30日現在）10件未満であり、そのほとんどは一般的な解説である。たとえば、フリージャーナリスト唐辛子の著書『日本女性の愛情武士道』（復旦大学出版社、2012年）は、代表的な日本人女性五人を取り上げ、そのうちの一人として宇野千代が論じられているが、宇野千代を個別に論じた研究論文は、未だ見当たらない。

なぜか？

研究者がどのような研究対象に目を向けるのかは、さまざまな環境に依存している。日本での宇野千代研究が、そのまま中国でのそれと相関するわけではない。ただ、宇野千代のような近代日本における女性表象へ中国の研究者の関心があまり向けられない状況は、翻って中国における女性の地位の状況を物語るのだともいえよう[1)]。宇野千代のような女性表象に注意と関心が呼び覚まされ、立ち現れるような状況にないのである。

宇野千代について研究すれば、現在中国女性に起こっている問題がどのような性格を帯びているのか示唆をうることができるのではないか、これが本稿の意図するところである。宇野千代という表現者は、近代日本における女性が直面したさまざまな局面を知らし

1）国連推計によれば、2015年時点で、世界人口は合計73億4947万 2 千人、そのうち男は37億720万 6 千人、女は36億4226万 6 千人、50.4％対49.6％の割合で若干男性の方が多い。ただし、寿命の長いいわゆる「先進国」では48.7％対51.3％の割合（合計12億5135万1千人、男は 6 億929万7千人、女は 6 億4205万 4 千人）となっている。つまり、女性人口が男性人口を上回っているものの、女性の方が男性より長生きする。

それに比べ、いわゆる「発展途上国」では、50.8％対49.2％の割合（合計60億9812万 1 千人、男は30億9790万 9 千人、女は30億21万 2 千人）で、男性人口が女性人口を上回っている 。

全世界の人口の約六分の一に占める中国の場合は、2016年 1 月19日、中国国家統計局発表のデータによると、2015年末の時点で中国本土の総人口は13億7462万人、前年末から680万人増加している。

急速な経済発展、急激な経済成長によって全世界に注目されている中国の現状では、その繁栄ぶりの背後には、様々な問題を抱えている。都市化、少子化、高齢化などの問題のほか、人口の約半分を占める女性の健康、雇用、仕事と子育ての両立など、とくに2016年 1 月12日、中国で「一人っ子政策」が全面廃止され、全ての夫婦に 2 人目の子どもを持つことが認められた。だが今回の政策の対象となる女性の半数超が40歳以上だということは、もう若くなく、家庭の負担が重く、仕事、老後などを真剣に考え始め、悩んでいる女性が殆どだということである。

よく、「国の将来を左右する第二の国民たる子女の教育に責任を持つ」、「将来の理想としては、子女の教育、生活費の稼得、家庭平和の維持といった精神的、物質的な家庭生活に対する責任は男女双方が担うべき」という社会を支える重要な役割であるとしての「女性」が、如何にして人生を有意義に送るのかが大きく問われている。

める、実に優れたメディアに他ならないと考えるからである。宇野千代という女性の一生を通して、ジェンター問題および独身女性の老後の問題、高齢社会への希望的存在は何か、さまざまな現代中国の課題がより鮮明になると考える。

本稿では、とりわけ、宇野千代の表現者としての始まりである〈新しい女〉という問題を取り上げ検討していくことにする。いわゆる「モダンガール」のような〈新しい女〉は、中国モダンにも登場する。だが、宇野千代の体現する〈新しい女〉は、日本と中国との間にどのような差異を見せることになるのか、考察していくことにしたい。

一　時代背景

宇野千代は1897年山口県岩国市に生まれた。1996年に亡くなるまで、明治期において、青少年時代を過ごし文学的なセンスを身に付け、大正期には、女流作家としてデビューし文壇に不動な地位を得た。昭和期に入っても、スタイル社を設立し雑誌『スタイル』編集発行人として成功を納め、戦後には「宇野千代きもの研究所」を設立するなど、さまざまな活動を展開した。平成という時代に至っても、岩国市名誉市民となり、文化功労者として顕彰されるなど、人々にとても注目され続けた。

彼女自身の言葉でその一生を喩えれば、「千年の桜の樹」のように人々に愛され、尊敬され、元号で表現される四つの時代を跨ぎ越すようにして、この世を去った。

そこで、千代が最初に日本中から脚光を浴びた大正時代は、いったいどのような時代であったのか、もう一度振り返って見る必要があるだろう。キーワードは、「良妻賢母」、「新女性」、「大正デモクラシー」、「大正ロマン」、「モダン」、「都市文化」などである、いずれにせよ、日本における従来の生活文化は、この時期に大きく転換しはじめたのだった。

1．良妻賢母と新女性

ジェンダー研究の瀬地山角は、その著『東アジアの家父長制―ジェンダーの比較社会学』（勁草書房1996）で、中国において「良妻賢母」の起源に言及した唯一のものは梁啓超の『変法通義』（1897）であるとしている。「良妻賢母」という言葉は、中国ではおもに「賢母良妻」という形の四字熟語として使用されるようになったが、これが最初に登場したのは、1905年の『順天時報』[2)]であるという。

2）名前の由来は北京（順天府）から。1901年末ごろ中島真雄氏（1859–1943）が主催。その後日本公使館が引継ぎ、日本外務省の資金援助を受け、中国での機関報となる（公益財団法人東洋文庫解説。http://www.toyo-bunko.or.jp/library3/shozou/jyuntenjiho.html 2019.7.26閲覧）。

『順天時報』は日本の民間外交団体である東亜同文会が創刊した中国語の新聞であったが、すでに日本では、1900年頃までには、「賢母良妻」がより一般的な用語法となっていた（瀬地山1996. pp. 132−133参照）。この「賢母良妻」という言葉について、中国の方が日本を源泉とし、日本の影響を強く受けたものであることは間違いないという（瀬地山1996. p. 135）。

また、『菊池前文相（菊池大麓）演述九十九集』（大日本図書1903）では、「男子であるがゆえに尊く女子であるから卑しいと云ふ事はない筈でござゐまする」（瀬地山1996. p. 199参照）とのべている。この時点においては、日本は国家的な観点から、女性の存在を重視し、国家の基本単位である家庭の安定、特に未来の国民を教育する母の存在の重要性を強調していたのである。

「良妻賢母」という言説は、否定的なニュアンスにしても、肯定的なニュアンスにしても、いずれにせよ、「主婦」なるものと同様に、国民国家システムの構築されていく、近代の産物にすぎない。近代における「主婦」の誕生は、彼女たちを市場とする商品を生み出すこととなるが、それによって「主婦」なるものをめぐる一つの文化が生まれた。女性が、大衆的な規模で、ある文化の担い手受け手になる歴史的にも珍しいケースがそこには生じており、さらに「新女性」の観念が構築されていく萌芽もあったのだといえる。

近代日本において〈新しい女〉が登場するには、そうした近代国家としての前提が整っていなければならないのである。とすれば、近代中国においてそれはどのような前提を必要としたのであろうか？　梁啓超は、言葉としての「良妻賢母」を受容したものの、近代国家構築の基礎として、菊池大麓のように、より目的意識的にそれを受容していたのか、定かではない。これは中国における女性史をどう捉えるのかという問題と連関しているが、ここでは宇野千代を通して、日本におけるその構造変化のさまざまな兆候を、以下に観察していくことにしよう。

２．大正という時代と〈新しい女〉

千代が青春時代を送った大正という時代（1912年７月30日から1926年12月25日）における、いわゆる「大正デモクラシー」の市民文化は、知識ある近代主婦たちをその重要な一翼としていた。また同時に、さらに注目され、影響力の大きかったのは、〈新しい女〉の登場である。

大正期の女性たちの生活様式には、その時代の特徴がよく反映されており、大衆レベルで西欧文化を日常生活に取り入れるようになったことはよく知られている。

たとえば、女性の「お洒落」は、和服から洋服への変化、髪型、化粧品の西欧化などによって代表され、流行歌、蓄音器レコード、映画、浅草オペラ人気など大衆芸能も人々の日常生活に占める位置を拡張していき、生活文化における変化は著しいものになった。

とくに女性の存在がクローズアップされ、〈新しい女〉という言葉はそれをよく表象した。

「新しい女」とは、狭義には、「明治44年（1911）から大正5年（1916）にかけて、雑誌「青鞜（せいとう）」を出した女流文学者のグループ（平塚らいてう・伊藤野枝ら）が中心となって主張した、近代的自我に目覚めた進歩的女性のこと。封建的な因襲を打破し、社会的にも家庭的にも、新しい地位を獲得しようとする女性」(『デジタル大辞泉』)を指すが、それは時代の全体状況をよく示す表象としての機能も果たしていたのである。

森まゆみ『『青鞜』の冒険　女が集まって雑誌をつくるということ』（平凡社2013）によれば、「青鞜社」は、平塚らいてうの首唱で、木内錠子（ていこ）、物集（もずめ）和子、保持研子（やすもちよしこ）、中野初子ら20代の女性5人が発起人となり、1911（明治44）年6月1日に結成され、事務所は旧駒込林町9番地の物集和子宅におかれ、その裏門に『青鞜社』と墨で書かれた白木の表札が掲げられたという。また、青鞜の名は評論家の生田長江（本名・弘治）が「ブルーストッキングはどうか」と提案したことによる。18世紀半ばごろ、ロンドンの資産家女性のサロンで男たちと科学・芸術について論じ合った女性らが青い靴下をはいていたことにちなみ、森鴎外がストッキングに『鞜』の字をあてたことがあるというので、『青鞜』とした（森2013参照）。

その有名な、「発刊の辞」では、次のように謳っている（小林登美枝・米田佐代子編『平塚らいてう評論集』（岩波文庫1987）。

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。

今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。

さてここに『青鞜』は初声を上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によって始めて出来た『青鞜』は初声を上げた。

女性のなすことは今はただ嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知っている、嘲りの笑の下に隠れたる或ものを。

つまり、女性を「家庭という小天地から、親といい、夫という保護者の手から」解放し、「独立の生活」をさせること。高等教育を授け、「一般の職業」に就かせ、参政権を与えること。そうした通常に唱えられる「自由解放」は「手段」あるいは「方便」にすぎず、それをのりこえた「真の自由解放」を目的として目ざさなくてはいけないというのである。その「真の自由解放」が、すなわち「太陽」としての女性の真正の姿を復活させることにほかならない、と言うのである。

村上信彦によれば、それは、「家制度」のもとに完全服従を強いられ、恋の悩みも欲望

も圧殺された生活が大半の女を支配していた「時代」への反発であり、当時の女性がいかに「人間以下」とみなされ、武家の家督相続制を受け継いだ明治民法で女性は家と夫に従属する「無能力者」とされ、治安警察法は女性が政治集会に参加することを禁じ、姦通（かんつう）罪は女性だけが罰せられ、夫が外に愛人を持っても妻は忍従を強いられ、婚外子の割合は明治末で約16％、大正半ばでも10％に上り、公娼（こうしょう）制度により、女性は国家公認で「商品化」され、「ひとたび金で女を買うことを知った男は、もはや純粋な一人格としての女性を理解することが出来ない。（略）女は一対一の恋愛の対象ではなく、男のための享楽の手段となる」（村上信彦『大正女性史』（理論社 1982）参照）、といった状況への全面的抵抗宣言であるとされる。

一般に、そうした女性への軛の一つに「良妻賢母」の観念も想定されているが、「良妻賢母」の観念も「家制度」も、江戸時代とは異なって、むしろ近代日本国家建設の一環として新たに創出されたという事実を踏まえるならば、それは逆に、〈新しい女〉の登場は、次のステップなのだともいえる。近代化に伴って新たな労働力供給と消費者が必要とされ、女性はその有力な資源として変生していったのである。

第一次世界大戦勃発により多くの男性が兵役についた結果、女性の社会進出が促されたのは欧米と同様の現象でもあるが、とりわけ近代日本においては、急激な国民国家形成の進展としての封建的遺制打破の動きとして受け止められるような事態を生じさせた。実際には、さらにそこには「都市と農村」の問題が残るのであるが、少なくとも都市部において、〈新しい女〉は時代の要請に伴って颯爽と登場することになる。

かつて大ヒットを記録したNHK朝のドラマ『おしん』も、まさにこの〈新しい女〉を描いたものであったが、それが広くアジア・アフリカ諸地域にも伝播した理由の一つは、日本の近代化モデルとして受容されたからともいえる。

従来の農業や家族経営の労働以外で、女性が大正時代にどのような職業に就いていたかを探ると、医師、看護婦、薬剤師、産婆、教育家（教師）、音楽家、（新聞記者）、写真師、電話交換手、タイピスト、専売局女工、手芸、洋裁・ミシン裁縫などをあげることができるが、大正中期以降になると、女工、事務員、外交員、美容師、婦人雑誌創刊に伴う雑誌記者、放送員、バスガール、デパート店員、女給などが新たに加わり、映画女優や女性アナウンサーも登場したばかりでなく、職業婦人の権利、地位向上へ向け、バスガール（女子車掌）東京婦人労働組合や、職業婦人団体連盟なども結成されている[3)]。

そして、モダンガール（モガ）が銀座をはじめ都会のメインストリートに登場した。従来の枠にはまらない「モダン」な「スタイル」の女性を指し、その 絶対条件は、洋装に

3）「オフィスで働く女性の元祖！「職業婦人」の歴史に迫る（前編）」（https://mypage.otsuka-shokai.co.jp/contents/business-oyakudachi/nostalgic-office/2018/04.html2019.7.26参照）。

毛断（＝モダン）、断髪であった。

〈新しき女〉は、髪型も新たなものになっていったのであるが、髪型の変化こそが女性のファッションを大胆に表現した。「耳隠し」と呼ばれる、熱した鉄製の鏝でウエーブをつけ、ふわりと柔らかく見せて後ろ髪は束ね、髪で耳を隠しているためその名が付いた髪型は、その典型であった[4)]。

このように職業婦人の社会進出のめざましさは、また、女学生の増加、高学歴化をもたらした。女性は従来の家庭における役割以外に、社会参加を徐々に実現していくのにともない、さまざまな「女性文化」が誕生し、上述の如く、ファッションや出版文化は目を見張るべき発展を遂げた。

彼女たちは、揶揄の意を込められ〈新しい女〉と称された。つまり、〈新しい女〉は、流行語となり、教養高いハイカラな女性、婦人の新しい地位を獲得していく女性といったポジティヴな意味を持つ一方で、因習に逆らう奇異な行動をする女性をさして使われた。

３．都会と郷村

当時、都市のもっとも先端を行く人たちは、実は都市の伝統文化と切れている流入者が多かったという。東京に生まれ育った人たち、例えば、谷崎潤一郎などは、むしろ、モダンな風景、都市化していく東京というものに対して非常に抵抗感を覚えている（毎日新聞社編『大正という時代』毎日新聞社2012、p. 145参照）。東京というもの、都市のモダンというものを捉える時に、それを伝統と切り離された、本当にモダンなものとして捉えるのか、江戸の文化や日本独特の情緒を含んだものであるのか、が問題となる。

東京出身者よりも、むしろ地方都市から出て来る人たちの方がモダニストになる、という現象は実に興味深い。地方都市で育ち、そこで様々な文化を吸収し、東京に行くといった流れを考えると、「大正期」の知識人は、依然として地方出身者たちが重要な部分を占めた。東京生まれの人たちが自己主張していくのは1920年代後半ぐらいからである、と成田龍一は指摘する（『大正という時代』2012参照）。後に、宇野千代も、「最もよく出来た田舎者」と友人青山次郎から言われたが、それはまさに当時のそのような社会現象を指

4）19世紀後半、フランス人のマルセル・グラトーが鏝（こて）を使って髪にウェーブをつける技術を考案し、「マルセル・ウェーブ」として世界的な流行となるが、さらにこの「耳隠し」の普及に寄与したのが、「資生堂美髪科」であった。1922（大正11年）、美容文化活動の一環として化粧品部ビル２階を改装し、美容科、子供服科とともに開業した美髪科（後の資生堂美容室）の主任には、米国から美容師ヘレン・グロスマンが招請され、日本になかったかぶと型ドライヤーも設置され、洗髪・束髪・縮髪など欧米の最新ヘアスタイルから美顔術、美爪・美眉術まで、モダンな美容法伝授の場となった。（山極清子「働く女性のリーディングカンパニーとしての資生堂」。http://www.business-creator.org/wp-content/uploads/2013/11/yamagiwa_11thgakkai.pdf#search=%27%E8%B3%87%E7%94%9F%E5%A0%82%E7%BE%8E%E9%AB%AA%E7%A7%91%27など参照。2019.7.27閲覧）。

している。

大正に入って、〈新しい女〉性の象徴として、イプセンの『人形の家』が築地小劇場において上演された。そうした小説や演劇運動の中で、〈新しい女〉のイメージはかなり大衆にも伝わった。良妻賢母教育の延長としてではあったものの、女性への教育が展開して、この時期に女性が執筆する小説も数多く現れることになる。それは「大衆」の登場する時代であった。

当時、宇野千代は、二十代半ばの完全な成人であり、関東大震災前後の日本社会への認識はとてもはっきりしていた。「おしゃれしないのは、泥棒よりひどい」とまで言ってしまった宇野千代もまた、モダンな〈新しい女〉であった。こうした大正という時代こそ、宇野千代のような〈新しい女〉を作り出したのである。

二　男という学校

〈女〉に安住しているように見える宇野千代は、「もっともフェミニズムでは捉えにくい作家」と位置づけられ、フェミニズムにとっては「諸刃の剣」とでもいうべき危険をいっぱい持った作家であり、作品であると評価されている（笹尾佳代「宇野千代における〈装い〉の意味―雑誌『スタイル』編集と「あいびき」をめぐって」『国文学論叢』第五十六輯2011、所収 p. 35）、という。

そうした「危険」は、宇野千代の「恋愛」と「仕事」そのものが予め孕んでいたものであり、宇野千代理解において、それこそ最も重要なポイントとなる。なぜなら、宇野千代の人生を追えば、「恋愛」すなわち「男性関係」と「仕事」しか出てはこないからである。この二つがあたかも車の前輪と後輪のようで、その動き次第で、あっちこっちに行き、時に暴走したり、動きが止まったりもしたといえるのだ。

宇野千代の時代は、親が勝手に決めた結婚、生活のための結婚、愛人関係の存在はごく当たり前であるような時代にあったが、彼女には、堂々と男性に「自分への愛情」を求める〈新しい女〉の姿が見られた。しかし、数度にわたるその結婚のいずれも、別れる結果となってしまった。しかし、宇野千代にとって、ある意味で、男とは「学校」であった。「学校」に入るたびに、何かを学び、そして自分自身は、どんどん、美しく、賢く、強くなっていったのである。

それは、伊藤整が「近代日本における愛の虚偽」を説くことと表裏一体であったのかもしれない。伊藤は、次のように説いている。

「信仰による祈り、懺悔などがないとき、夫婦の関係を「愛」という言葉で表現することは、大きな、根本的な虚偽が実在している。……男女の間の接触を理想的なものたらしめようとするとき、ヨーロッパ系の愛という言葉を使うのは、我々には、躇われるのであ

る。それは「惚れること」であり、「恋すること」、「慕うこと」である。しかし、愛ではない。性というもっとも主我的なものをも、他者への愛というものに純化させようとする心的努力の習慣がないのだ。……実質上の性の束縛の強制を愛という言葉で現代の男女は考えているのだ。愛してなどいるのではなく、恋し、慕い、執着し、強制し、束縛し合い、やがて飽き、逃走しているだけなのである。」（伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』岩波文庫、1981、所収、参照）

宇野千代は、ある意味でヨーロッパが神への愛を捨て去って突入した資本主義社会が流入している渦中の近代日本において、まさにその実生活の偽らざる「恋」を生き、その〈新しい女〉を生きたのだといえよう。

1．切ない初恋

宇野千代は、大正 3 年（1914）3 月、岩国高等女学校本科（四年制）を卒業したあと、川下村尋常小学校に準訓導（代用教員）として、月給 8 円で採用された。ところが、学校に赴任して来た新しい教員に恋をしてしまった。彼に当てたラブレターを生徒に届けさせるということまでやってしまい、この事件は町中の評判となったため、やがて免職になってしまった。当の相手の、宇野千代に対する態度は冷たかった。彼からの「絶縁」を示すような手紙を受けた宇野千代の初恋は、失恋という形で終わった。

そこで学んだことを、宇野千代は後に次のように記している。

「恋愛は男と女と二人の人が一緒になって奏でる音楽です。ちっとも相手の気持ちを考えようとはしないで、自分だけで夢中になっているのは、本当の愛ではないのです」（宇野千代『生きていく私』参照）。

この頃の宇野千代は、自分が一体その生涯において何をするのかについて、未だよく考えてはいない。この世に生を受けた一人の人間として、何を目当てに生きるのかということをも、考えてはいない。自分に生活力があるのか？　経済的に自分でやっていけるのか？　自分自身が何を目的として生き、何によって生計を立てるのか、といったあれこれについても、はっきり考え、見えていたわけではなかった。

初恋の「事件」の後、単身朝鮮の京城に渡ったものの、間もなく帰国し、従兄弟の忠を頼って京都へ行き、そのまま一緒に暮し、大正六年、彼が東大に入学すると20歳となっていた彼女も上京した。この東京での忠との同棲生活は貧乏を極め、彼女も生活のためにさまざまな仕事を転々とした。数日間であったが、本郷三丁目にあった歴史的レストラン「燕楽軒」で女給として働いたことが、後に彼女の人生に大きな影響と幸運をもたらすこ

とになった[5)]。芥川龍之介の短編「葱」に主人公として登場する女性は、その当時の宇野千代がモデルであるともいわれているが、定かではない。

２．安定した初婚生活

代用教員であった頃の「失恋」により、若き宇野千代の「放浪」が始まり、その足跡は京城、京都、東京、北海道にまで広がる。宇野千代の生涯においては、三回の結婚、一回の同棲生活（実婚）と無数の恋愛があったが、その離婚や別れは、いずれも緊張したものであった。

初めての結婚相手は、当時まだ、「自由」を標榜する第三高等学校の在学中の藤村忠だった。その後、忠は東京帝国大学へ進学し、上述したように宇野千代も一緒に上京する。その東京滞在中に、宇野千代の人生にとっての転換点が訪れた。『中央公論』編集長滝田樗陰などとの運命的な出会いによって、後の文壇デビューのきっかけを得たからである。

とはいえ、22歳の時、忠と正式に結婚し、共に忠の勤め先のある北海道での生活を始めた頃は、金の心配もなく安心な生活を送り、本気で小説を書ける、比較的安定した時期であった。このような環境を与えたのは、夫、忠であったが、忠が宇野千代にあまりにも安心な環境と自由を与えすぎた結果、当時の日本文壇に女流作家を生み出した。それは同時に、自分の妻まで奪われてしまったことでもあった。皮肉という他ない。しかし、忠は、妻の裏切りを何も責めなかった。宇野千代が忠のその態度に学んだものは、「相手を追いかけてはいけない、追いつめてはいけない」ということであった。これは恋愛の武士道ともいうべき態度であった。

いわゆる経済力を手にした女、自立、自活できた女ほど恐ろしいものはない。宇野千代にとって、平凡で、落ち着いてものが書ける、そのような優れた環境がふたたび訪れるのは、40年もの後、三番目の夫、北原と別れてからのことになる。宇野千代は、26歳の時、最初の作品集『脂粉の顔』（改造社、大正12年）を出版し、その翌年、正式に忠と協議離婚した。ペンネームも藤村千代から宇野千代となった。

宇野千代の文学的出発は、時事新報が募集した懸賞短編商品小説で一等に入賞したことから始まった。大正10年１月のことである。時事新報は前年の11月、短篇小説の懸賞募集を行い、明けて１月21日、里見淳、久米正雄の選による審査結果を発表した。３千を越える応募作品の中からまず六篇が選ばれ、二人の審査員が各作品を採点し、作品ごとの得点も載っている。二等が尾崎士郎、選外佳作（四等）は横光利一であった。

５）NPO 宇野千代生家「年譜」による。http://www.unochiyoseika.jp/content/unochiyo_b.html　2019年７月29日閲覧。

〈当選は実に意外です〉の見出しで、当選した宇野千代の声は、報道では次のようになっていた。「……当選の報を斎して女史を訪ふと、喜びに輝いた顔をあげて語る『あれが当選した、全で嘘の様です。締切間際になつて絞り出す様にして書いた物で、統一の無い、支離滅裂な描写を慊らなく思つて居たのでした。紙上へ出てからも、あの六篇の内の一番のお尻の方にやつと引掛つて居るのだと思ふと、極りが悪くなる位だつたのです。何だか今になつて、狼狽へて自分の周囲を見廻し度くなります』」（都築1997、p. 79参照）。

さらに、〈私は自分の書いたものに対して支払われたその金額に驚天しただけつであつたが、まづ、巣鴨の畑の中にあつた百姓家の離れ〉を借り、とうとう北海道には帰らなかつた。

『私の文学的回想記』[6]の中で、〈私はながい間、金を目的に仕事をしました。何を書くのかを決めるのは、何が金になり易いですかといふ判断だつたのです〉と樋口一葉ばりのことを繰り返し述べているのは、半分は正直なところであろうが、いささか偽悪ぶった言い方だとされている（都築1997、p. 81参照）。

３．おしどり夫婦

離婚２年後の1926年、宇野千代は、一歳歳下の尾崎士郎と正式に結婚し、東京府荏原郡馬込村に移居した。彼らを引き合せたのは評論家の室伏高信であった。この時期、いろいろな文筆家との交流もあり、評論家の扇谷正造は、宇野千代と尾崎について、大凡、次のように記している。

「文章をかくには、三つに分けて書くことよ。四百字の短文も一千枚の長編もそうよ」ということも、尾崎から教わったことの一つであった。尾崎士郎が小説が売れなくって悩んでいた頃、千代がズバリ助言もしました」。また、千代は尾崎にたいして、「あなたの小説、まるで評論みたい」ということで尾崎がハッとして、書き上げたのが『人生劇場』だと伝えられているが、千代は、鋭い洞察力を持つ人でした」（宇野千代『宇野千代全集』第六巻参照）。

ところが、尾崎との結婚生活は、「朝から晩まで、よそ眼にはおしどりのように仲よく列んでいる、世にも幸福な若夫婦に見えました」、「尾崎の好きである、と思うことは、私はなんでもした」と宇野千代自身も言っていたのであるが、結局のところ、四年しか持ったなかった。

その別れの主な原因は、お互いへの不信によるものだった。結婚には将来の理想や目標が一致することは大切であり、同時に二人の間の相互の信頼と愛情が絶対必要である。つまり、結婚とは精神と肉体と経済生活をともにすることなのであるから、それらの点を考

6）宇野千代．宇野千代全集（第12巻）中央公論社．1978.

慮して決めることが重要であるのだが、宇野千代には、「性というもっとも主我的なものをも、他者への愛というものに純化させようとする心的努力の習慣がないのだ」。

４．出会ったその日からの同棲生活

フランス帰りの画家東郷青児は、愛人の西崎盈子という女性と運命的な恋におち、彼女の両親に反対されたことから心中未遂事件がおこし、新聞に大きく取り上げられた。

宇野千代は、その東郷に、ガス中毒死について問い質しに行った。そして、出会ったその日から家に帰らず、事件の血が生々しくこびりついたままのふとんにくるまってねむり、盈子が残した白粉入れを使って化粧直しをするなど、まるで「ゐつく」ように同棲生活を開始した。

宇野千代は、洋服を仕立てるために横浜へ行った折に、ふくらませた袖のかたちなど、同棲していた青児がうるさいほど職人に指示したというエピソードを書き残している。また、彼女の肌の美しさを誉め、「白粉ではなく、油だけを塗って肌の美しさを強調」するようすすめた。

東郷の影響を受け、千代は断髪にシャツ、ネクタイというギャルソンヌ風のファッションを粋に着こなした。それまで、着物一辺倒だった千代は、パリ帰りの青児の影響で、洋装を楽しむようになった。二人は芸術家同士のカップルとして世田谷の淡島にあった「コルビュジエ」風の白いモダンな家に住み、創作面でもお互いに刺激し合いながら、いくつもの美しい作品を世に送り出すことになった。いつでも宇野千代は、相手の男の好みに合わせた。当時は東郷のスタイルに合わせ、好きでもない犬まで飼っていた。

しかし、人生とはわからないものである。千代との約五年間の同棲生活を経て、東郷は、一度は親のすすめる結婚をしたものの、破れた盈子と再会、生死をかけた恋も紆余曲折を経て、やっと成就した。東郷が情死未遂事件を起こした女性とよりを戻し、宇野千代とは完全別居し、同じ年に東郷はその女性と結婚した。だが、それについて宇野千代は何もいわなかった。自ら選んだ道にはどんな苦労があっても耐え抜く力が欲しい、そういう生き方が自主的な生き方だ、と言うのであろう。東郷と別れた後も友人関係を保った。

しばしば愛情だけに溺れ、恋愛を結婚と直接結びつけることがよくあるが、〈新しい女〉は、恋愛した相手が生涯を共にできる結婚の対象となりうる人であるのかどうか、見極めるだけの理性をもつ必要がある。恋愛においてもそのような理性が働く女性は、素晴らしい主体性のある女性であろう。自分の愛情を点検してみることができるなら、それこそ女性の進歩であると言える。

宇野千代は自己の多面性をこんな風に語っている（笹尾2011、p. 41参照）。

私の顔は幾つもある。ここにも私はその六つ七つの顔をみな列べるのがほんたうではあるまいかと思ふのである。だが、もう一つほんたうのことを言ふとその六つ七つの顔もみな嘘だ。それらはみんな私の仮面にしか過ぎないからである。（中略）あんまり長い間私は面を冠つていたので、面を脱がうとすると、その面の裏にたつぷりと肉がこびりついているのである。（中略）だから私は何処へゆくにも紅筆と白粉を持つて歩く、私の面は脂粉の極色彩だ。

5．ふたりの「子供」：女性ファション誌『スタイル』を創立

多様な顔を持つ〈新しい女〉宇野千代が、自らの何者であるのかを表現する手段として、多彩な〈装い〉へ向かうのは、ごく自然な流れであるといえよう。〈装い〉がアイデンティティ構築に関わるものとして機能する様相だからである（笹尾2011参照）。

そこで、〈装う〉宇野千代の身体が、端的にもの語るのは、装うことと〈女〉であることとの不可分のジェンダー・アイデンティティであろう。

笹尾（2011）は、ジェンダー・アイデンティティと〈装い〉が結びつくことによって、宇野千代は、奇妙な自己を表現していき、そこでは過剰な意味が付与されて、宇野千代の自己表象における〈装い〉の位相とアイデンティティとの関係が生じているとしている。

宇野千代の〈装い〉への関心は、1936年6月に先駆的なファション専門雑誌『スタイル』を創刊し、編集していくところに、〈新しい女〉の一つの形を構築していく。『スタイル』の編集に参画することになった北原武夫の小説を評価し、文芸誌『文體』を出すことで、文筆活動の場を作り、北原は宇野千代にラディゲ、コンスタンなどのフランスの心理小説を教えた。宇野千代は、ことにラファイエット夫人の『グレーヴの奥方』からは多大な影響を受け、フランスのモラリスト、アランを読むようになったのもこの頃からであった。

北原と千代は昭和14年（1939）に結婚する。十歳も年下の北原との結婚は周囲を驚かせたが、二人はすでに離れがたい関係にあり、すでに宇野千代の新たな「男という学校」は成立していたのであった。

敗戦後、北原を社長、千代を副社長としてスタイル社を再興することになるが、復刊した『スタイル』は、ファッション誌の先駆けとして驚異的な売れ行きを見せた。その翌年には『文體』も復刊した。この宇野千代のカリスマ性と、新聞社で磨いた北原の卓越した編集センスが凝縮された『スタイル』は、戦前戦後と時代を経て、ふたりのあいだで育てられた、いわば「子供」であったといえよう。

だが、『おはん』執筆の間、北原は若い女性と関係を持ち、昭和30年から宇野千代とは別居状態にあった。スタイル社の経営も傾き、やがて倒産に追い込まれることになる。宇野千代は「きもの」の売り上げで、北原は中間小説などの文筆収入で、負債の返済に奔走

し、完了したのは昭和39年（1964）春であった。尾崎士郎も亡くなったその年の９月、67歳の宇野千代は北原と離婚した。出て行く北原の荷物を纏めながら、宇野千代は何も言わなかった。すでに記したように、恋愛にしても、結婚にしても、つねに主体的に強い感情とともに、理性を保つ存在でありたいと考えていたのである。

昭和41年、北原との別離を辿る『刺す』を発表した。宇野千代にとってそれは、以後一人で生きて行く宣言とも言うべき覚悟の書であった。それから自分の根源を掘り出すような小説を立て続けに執筆することになる。

人が仕事を成し遂げるためには「三段階の要素」が必要である。土台は「体力」、そして「気力」、その上に「能力」である。フランスの哲学者アランの言葉、「世にも幸福な人間とはやりかけた仕事に基づいてのみ考えを進めていく人のことであろう」が好きだった宇野千代は、「人間は何でもできると思えば、できる。才能は情熱でカバーできる」というのが口癖だった。

日本には、古くは中国大陸、その後は欧米のマネをすることで産業を発展させてきた歴史があり、そのため学校などでは新しいチャレンジをするより「正解を学ぶ」ことに重点を置いてきた。時代は変わり、多様な価値観の中で自分の生き方を探る時代がやってきた。宇野千代のように「失敗する」を覚悟で、自らの人生を選ぶ時代になった。

「何がしたいのか」をよく考え、自分で道を切り拓いていき、道が無ければ、自分で足を踏み出し、悪路で足を取られても、嫌われてもとにかく歩いてみることが求められる時代に他ならない。そうやって切り拓いてきた〈新しい女〉の路は、ただ受動的であっては進めない。多くの宇野千代研究がすでによく指摘しているところであるが、尾崎、東郷、北原などといった人物たちに、宇野千代自身は、むろん学ぶところが多かったであろうけれど、同時に彼女が彼らに与えた影響の大なることもまた、疑う余地はないのである。

むすびに

本稿では、宇野千代という女性の生涯を、ひとつのサンプルとして、〈新しい女〉の肖像を描いてみた。むろん、それをすべての女性の生活、人生に当てはめることはできない。

現代は、寿命が延び、女は男より十年も長生きする。〈新しい女〉が〈新しい女〉であり続けるには、子供が独立した後の二十年、三十年、何をして生きるのか？ 〈新しい女〉は、夫にからみつく葛のようなタイプではありえない。もし、そうなら夫が倒れたら共に倒れてしまう。〈新しい女〉は、自分自身が何を目的として生き、何によって生計を立てるのかをはっきり考え、自分一人となっても、どのように経済力をつけるのかを考える必要がある。ことは経済の問題だけではない。生きる喜びを何に見出すかということが大切

である。

宇野千代は98歳まで生きた。彼女にとって、その若さの源泉となったのは、「綺麗」であることは人生でも数年間に過ぎないが、「美しさ」はいつまでも継続できる、という信念であった。「美しさ」の構成要素はいくつかある。中でも「生き生き」としていることは必須条件である。どのような年齢であっても、どのような職業であっても、「生き生き」としている人は、それだけで美しい。若いか年を取っているかは本当の問題ではない。大事なのは、肉体の美しさを精神の美しさに移し替えていくことである。「綺麗な時期」は儚いものだが、真の「女の美しさ」は永続するものである。

宇野千代は、「年をとった女なんて、この世にいないのよ」、「女の若さは一時的なものですが、むしろ本当の女の美しさは、精神的なものから滲み出」る、という信念を持つに至った。自分の年齢は自分で決める。それは身だしなみや精神の在り方次第なのである。

「人生はいつだって今が最高の時なのです」と豪語する宇野千代の中年期は、まさにビジネスウーマンとしての成功期であった。98歳という高齢での逝去も、〈新しい女〉の生き方そのものが、年長者の手本ともなるべき積極性を示した。そして、生命力溢れる生きざまは、多くの者に勇気を与え、社会的にも大きなインパクトを与えるものであった。

なぜ、インパクトを与えるのかといえば、宇野千代が体現している〈新しい女〉が、実は、近現代日本の資本主義そのものの「肖像」だからなのではないか。〈新しい女〉イメージにそうした視角を持つことが、重要ではないかと考えるのである。

既述の「時代背景」においても記したように、「良妻賢母」や「家父長制」は、一般に認識されているような、「旧弊」ではなくして、実は近代日本が国民国家形成の過程で新たに構築された新たな「制度」に他ならず、『青鞜』を契機とする「新しい女」は、近代日本の資本主義化と国民国家化における新たな段階の表象なのであると捉えれば、その後、宇野千代が体現していくような〈新しい女〉とは、まさに日本資本主義の諸形態の反映に他ならないことがよく分かるであろう。そこには「大衆」の欲望がさまざまに表現され、実現され、消費されていく。宇野千代の実に経済的自立性を計算に組み込んだ奔放な性行動も、そうした奔放な資本主義的欲望の一環としてあるのではないか。本稿が確認してきたのは、まさにこの点であった。

実は、この宇野千代の〈新しい女〉の資本主義的性格を、近代日本の歴史的文脈において位置づけたのは、宮本百合子であった。彼女は林芙美子との対比において、宇野千代について次のように述べている（宮本百合子「婦人作家」、宮本百合子全集、第十三巻、新日本出版社、1979）。

……一九二九年に『女人芸術』に「放浪記」を発表して文学的登場をした林芙美子と、一九二〇年に短篇「脂粉の顔」をもって登場した藤村（宇野）千代の文学的足どりには独

特なものがある。これら二人の婦人作家は、その出発のはじめ、それぞれに彼女たちが無産の女であり、生きるためにかよわい力で貧にまみれながら日々を過しているその境遇から生れる文学であることを訴えた。この訴えは、当時の社会的感情にうけ入れられやすかった。同時に彼女たちは、ただよう雲をみているような風情によって、また、どんなに貧しくてもその中で男のためにはいそいそと小鍋立もする、いじらしい女の文学としてのよそおいを強調した。そして、その貧しさという一般性と、そこにからめられたなにかはかなくとりとめない女の詩情のアッピールによって、貧しく出発した林芙美子は、「女の日記」を通って今日「晩菊」の境地に到達した。宇野千代は、一九三三年の「色ざんげ」を文学的頂点として、やがて「スタイル社」の社長となっていった。

この二人の婦人作家たちは、プロレタリア文学運動に近づかない自分たち女というものをアッピールすることによって、平林たい子とまたちがった文学行路を辿った。彼女たちがしめした道行は、田村俊子の生活と文学にみられなかった、より高度な資本主義への姿である。……

宮本百合子が、「それぞれに彼女たちが無産の女であり、生きるためにかよわい力で貧にまみれながら日々を過しているその境遇から生れる文学であること」としているについては、当時の僅かな情報による認識の限界が反映したものである。最晩年になって本人が明らかにしているように、実は、宇野千代は、部屋の数が32もある造り酒屋の家に生まれ、少女時代はほとんど外へ出ることなく、「千代さま」とよばれ、13歳で金襴緞子の花嫁になったが、放蕩をきわめた父が死に、花嫁御寮の身から解放され、初めて聞いた浮かれ節（浪花節）に魂を奪われ、ウサギの足でつくられた柔らかいパフにも心奪われ化粧する娘になって、最初の親友は男装の女学生だった……おそらく、こうした十代までの宇野千代の経験が、激烈な社会主義の時代において、彼女を資本主義へ馴化していくことなったのであることは、疑いえないであろう。

ここで「より高度な資本主義への姿」とは一体何を指すのか、今後の課題となることを明示して、本稿を一旦閉じることにしたい。

参考文献

日本語文献

1．青木淳子．雑誌『スタイル』初期にみる宇野千代のきものの美意識．語学教育研究論叢．第34号 pp. 221–236.
2．荒井新理亜．宇野千代「色ざんげ」論――語りスタイルの意味．関西大学国文学会．2008（92）：235–249.
3．生田誠．モダンガール大図鑑　大正・昭和のおしゃれ女子．東京：河出書房新社．2012.

4．石川桂子．大正ロマン手帳　ノスタルジック＆モダンの世界．東京：河出書房新社．2009.
5．伊藤るり・坂元ひろ子・タニ・E・バーロウ．モダンガールと植民地的近代　東亜細亜における帝国・資本・ジェンダー．東京：岩波書店．2010.
6．伊藤整．近代日本人の発想の諸形式（岩波文庫）．東京：岩波書店．1981.
7．上田みどり．家父長社会における宇野千代の作品に表われる情念―英米女性作家との比較研究試論．広島経済大学研究論叢．2004年12月．第27巻第3号 pp. 5–10.
8．宇野千代．宇野千代全集（全12巻）．東京：中央公論社．1977–1978.
9．宇野千代・小林庸浩ほか．宇野千代　女の一生．東京：新潮社．2006.
10．宇野千代．生きて行く私．東京：角川文庫．1996.
11．海野弘．モダンガールの肖像　1920年代を彩った女たち．東京：文化出版局．1985.
12．菊池前文相演述九十九集．東京：大日本図書．1903.
13．小林登美枝・米田佐代子編．平塚らいてう評論集（岩波文庫）．東京：岩波書店．1987.
14．佐伯彰一【解説】．おはん・雨の音（新潮現代文学７）．東京：新潮社．1980.
15．笹尾佳代．宇野千代における〈装い〉の意味―雑誌『スタイル』編集と「あいびき」をめぐって．国文学論叢第五十六輯．2011．pp. 34–47.
16．瀬地山角．東アジアの家父長制―ジェンダーの比較社会学．東京：勁草書房．1996.
17．田中美代子．宇野千代・人と作品．昭和文学全集10．東京：小学館．1987年４月．pp. 1051–1057.
18．竹村民郎．大正文化帝国のユートピア　世界史の転換期と大衆消費社会の形成．東京：三元社．2004.
19．都築久義．宇野千代と尾崎士郎―その出会いと別れ．愛知淑徳大学国語国文．（愛知淑徳大学国文学会）第20号1997. 3. 20．pp. 77–100.
20．毎日新聞社編．大正という時代．東京：毎日新聞社．2012.
21．宮本百合子．婦人作家．宮本百合子全集　第十三巻．東京：新日本出版社．1979.
22．村上信彦．大正女性史．東京：理論社．1982.
23．森順子．生き抜く人間の姿――宇野千代論．人間環境大学編『こころとことば』2002（3）：51–63.
24．森まゆみ．『青鞜』の冒険　女が集まって雑誌をつくるということ．東京：平凡社．2013.
25．山口路子．ココ・シャネルという生き方（新人物文庫）．新人物往来社．東京：2009.

中国語文献

1．唐辛子．宇野千代的人生幸福论．心灵鸡汤．2015（4）：12–13.
2．唐辛子．日本女性的愛情武士道．上海：復旦大学出版社．2012.
3．刘世河．“失恋女王”的潇洒人生．恋爱婚姻潇洒养生．2013（4）：60–61.
4．刘世河．失恋只是皮外伤．家庭之友爱侣．2012（5）：12.
5．刘姿妤．用幸福呼唤幸福．八小时以外．2014（8）：100–103.

その他

オフィスで働く女性の元祖！「職業婦人」の歴史に迫る（前編）（https://mypage.otsuka-shokai.co.jp/contents/business-oyakudachi/nostalgic-office/2018/04.html
『順天時報』（公益財団法人東洋文庫解説）http://www.toyo-bunko.or.jp/library3/shozou/jyuntenjiho.html
NPO 宇野千代生家年譜 http://www.unochiyoseika.jp/content/unochiyo_b.html
山極清子「働く女性のリーディングカンパニーとしての資生堂」http://www.business-creator.org/wp-content/uploads/2013/11/yamagiwa_11thgakkai.pdf#search=%27%E8%B3%87%E7%94%9F%E5%A0%82%E7%BE%8E%E9%AB%AA%E7%A7%91%27

デジタル大辞泉

NHK ドラマ　おしん

＊本研究は、2015年度中国浙江省教育庁一般項目、「東アジア共同体における女性の役割――近現代中日女性のイメージを中心として（1915–1931）」（Y201534598）の助成による成果の一つである。